

岡本博司先生の思い出

—本学大学院岡本ゼミ副査として—

商経学部教授 中 村 壽 雄

本学大学院生の御指導で、「財政学」の後継者となられた栗林 隆先生より、本追悼号に「追悼文」とを御誘いがあり、改めて、岡本先生の代表的論稿や翻訳を読み返し、先生の御研究振りの一端を私なりに紹介してみたいと思う。

平成21年2月25日付の本学「広報」にもあるように、先生は早稲田大学大学院経済学研究科修士課程の出身で、時子山常三郎門下の俊秀と謳われれば、あるいは、常に「天下国家を論じて」いると思われる向きも多いかと思うが、先生が目標とされたものは、今日有名になったバージニア学派の J. M. ブキャナンの「公共選択の理論」を基にした、むしろ、ミクロ的価格分析に、正統的な R. A. マスグレイブラの財政学、果ては K. ヴィクセル、E. リンダールらの北欧学派までを包含して、私的財と公共財の混在する市場経済において、経済的な「公平」と「効率（中立）」（さらには税制の「簡素」まで）を統合しようかという意欲的な「財政学」であった。ただし、本学院生の将来について早くから深く考えられた先生は、院生用の修士論文の主題には、御専門のうちでも歳入面（つまりは税の面）を取り上げて指導された。だから、篠塚慎吾氏（故人）と私との三人でまとめた論文で、ニューディールと A. H. ハンセンの補正的財政政策を扱った達意の論考を見る時、早稲田の語学から入る重厚な学風と広範多岐に亘る読書家だったことを考え合わせ、かつ、先生本来の「財政学」研究をもっと自由に御進めになっていれば、また違った一面があったのではないかと思う今日此頃である。